拡充の昭和三十年代

1

短期大学は、昭和二十五（一九五〇）年に全国で公立十七、私立百三十二、計百四十九校が一斉に開学した。家政系、教養系などに関する学科を主とするところが多かった。こうした学科の専攻分野はどちらかといえば女性指向のものとあって、女子学生の比率が高く、「短期大学は女子の進学先」というイメージが強く打ち出された。

そうした中、「安城学園女子短期大学」も産声をあげた。

学園では前年の四月に保育園を、九月には各種学校として「安城学園家政文化学院」を開設し、経営の立て直しを図っていたが、短期大学設置に伴って保育園に代えて安城学園女子短期大学附属幼稚園（現愛知学泉短期大学附属幼稚園）を設けた。ここに短期大学を核として高等学校、中学校、幼稚園を擁した総合学園をいち早く形成したのだった。

安城学園女子短期大学の学生たち。美術室のベランダに春の訪れを待つ（昭和27年頃）

―もう再び教壇に上がることはできないであろう。

だいは、公職追放を受けて、ほぞを固めていた。しかし、追放が解除されて復帰が可能になった。

―昔の仕立屋・裁縫塾に戻ったつもりでやろう。

戦後の新しい教育制度が確立されて、何もかもが出直しだった。だいは、学園の現状を見るにつけ、原点から再出発する思いを強く抱いた。

昭和二十九（一九五四）年、だいは理事長を引き受け、会計も自ら担当、事務関係一切を娘の二三子に受け持たせることにして学園経営に本腰を入れることにした。

＊

物事・事象は単純化すれば伝えやすい。しかし、多面的な視点が欠けることで、本質を見失う場合もある。その危険をあえて冒して俯瞰（ふかん）すれば、昭和三十（一九五五）年は戦後十年の節目の年であった。翌年七月発表の第十回「経済白書」（経済企画庁発表）で、戦後の復興経済にピリオドが打たれた表現として「もはや戦後ではない」と謳（うた）われたことにもそれが表された。

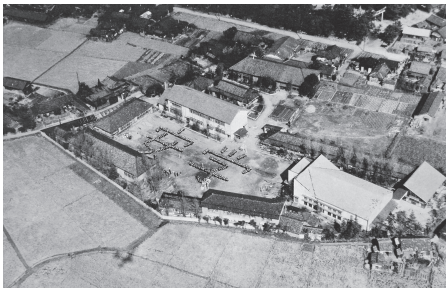
2

時勢はその後、「神武景気」、「岩戸景気」の好況を受けながら、経済高度成長期に入り、昭和三十年代半ば頃から社会経済のあらゆる面で急速な変化がもたらされていく。その中、教育界にお

いても、戦後のベビーブームという人口現象が大きな影響を及ぼすことになった。

だいは、もともとこうした教育情勢・教育環境の変化に常に敏感な洞察をおこなって、その時々に対応することに長けていたが、昭和三十年代に起こった激動にも次々と対応し布石していった。

手始めに昭和三十二（一九五七）年四月、短期大学附属中学校を発足させた。正しくは〝再開〟だった。女子中学校は昭和二十二（一九四七）年、新学制実施に伴って開校したが、中学校が義務教育であり各市町村で一斉に設置されたことから、授業料を払う私立の中学校は敬遠されがちで、生徒の募集に難渋した。昭和二十六（一九五一）年四月には、生徒定員百五十名に対して在籍生徒数は四十二名。特に一、二年は七、八名と激減した。このため、ついに昭和二十七（一九五二）年四月、生徒募集を中止し、閉校の措置を取っていた。それを再開したのだった。



昭和 30 年頃の安城学園全景（右端が幼稚園、その左下が講堂、「安学」の人文字えがく運動場の上が中央校舎（木造２階建）

その対応は、やがて迫る〝ベビーブーム〟による生徒増に備えるものだった。

昭和三十年代、教育界は生徒数の激しい増減に振り回されることになった。

戦争終結の直後、極端に出生数が増える人口現象〝ベビーブーム〟が起き、昭和二十二（一九四七）年から昭和二十四（一九四九）年の三年間の出生数はそれぞれ二百五十万人を超え、合計すると

約八百万人程度が誕生した。このため、小学校児童数の増加は昭和二十九（一九五四）年頃から始まり、昭和三十三（一九五八）年頃にピークに。その波は、中学校には昭和三十五（一九六〇）年頃、高校には昭和三十八（一九六三）年頃から波及してきた。

こうしたすう勢が予測される中、学園では、一時閉校していた女子中学校の門戸を再び開いたのだった。

3

中学校再開と同時に、高校にも手を打った。この先の生徒数の増大を予測して、普通科、家庭科の二通常課程だった学科を普通科、生活科、商業科、家庭科（別科）とし、西三河地方で唯一四学科を擁する総合高校にした。

また、この頃から高校への進学率の高まりが全国的に目立つようになり、それがやがて大学への進学率にも伝播した。安城学園においても、高校から上位校である短期大学へ進む生徒数が増えてきた。そこで、中学校、高校、短期大学という女子一貫教育を名実ともに明確にするため、翌三十三（一九五八）年には高校の校名を「安城学園女子短期大学附属高等学校」と変更した。

ベビーブームを背景に、各学校の施設建築もラッシュとなった。一九五〇年代から七〇年代にかけて、教育関係の新聞記事は学校建築に関するものが多数に上ることが指摘されているが、とりわ

け一九五〇年代は、校舎・体育館・講堂・プールなどの新増築が各校でめざましかった。

その中、安城学園でも、

・本館（昭和三十一年十一月）
・短期大学生活科ビル（昭和三十二年五月）
・新館（昭和三十三年六月）
・体育館（昭和三十六年四月）

と、次々と施設が建てられていった。だが、安城学園のそれらは何れも、期せずしてその時その時に熱く注目され、話題を呼ぶものだった。

完成した本館・屋上での新館竣工祝賀会。本館・屋上からは周辺が一望された

本館は鉄筋三階建であった。学園最初の鉄筋建物であっただけでなく、「安城市初の鉄筋ビル」のレッテルが張られるものだった。屋上は体育の授業にも使用されたが、屋上から周りを眺めた景色は起伏に乏しい広野が一面に。このような建物は他に見られず、当時の安城において唯一の近代的な建物であることが実感された。

安城学園は戦前もそうであったが、戦後においても、安城初、いや全国初といった出来事をいくつも重ねていく。

「学校は文化の中心にならねばならない」

かつて昭和二十二（一九四七）年、講堂建設のときも、当時の清毅理事長のこうした信念で、終戦直後の物資欠乏の中、本格的な建築にかかり、人々の耳目を集めた。そしてまた昭和二十四（一九四九）年には幼稚園を再開するなど、安城の戦後教育に先鞭（せんべん）を切ったのだった。

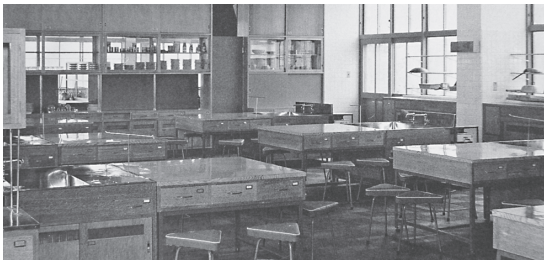
4

短期大学生活科ビルは、鉄筋二階建。それまで短大、高校で使っていた調理実習室を共用することは困難な状況になり、短期大学専用の調理実習室を新設することになった。

だいはこの新調理実習室を理想的なものにして、短期大学の特色の一つにすることを考え、斬新なアイディアを盛り込んだ。教室と実習室を無隔壁で並行するようにレイアウトし、階段教室で講義を受けてただちに実習に移ることができるようにした。この高度の教育機能を備えた施設は、当時他の高校、短期大学で実習室が新・改築される場合、原型として倣（なら）われていくものとなった。

次いで鉄筋二階（一部三階）の新館は、本館と短期大学生活科ビルの間に建設されたものであった。これまで教育内容の異なる短期大学と高校の教室の分離が強く望まれていたが、これにより同一建物に混在していた短期大学・高校の教室が分離され、両校の独自性が確保されることになった。

そして、昭和三十六（一九六一）年の体育館。発端は伊勢湾台風にあった。昭和三十四（一九五九）年九月二十六日、東海地方を襲った伊勢湾台風は三河地方にも大きな被害を与えた。学園も、木造



よく設計された短期大学生活科ビルの調理実習室は他学から注目された

部分の校舎は甚だしい損傷を受け、特に講堂は半壊し使用不能になってしまった。このため、それまで講堂で催されていた学園の数多くの行事が戸外または学外の会場に求めねばならないことになった。安城公園（現市役所所在地）、本館南の空地（現小堤公園）を借用して体育の授業などが行われたが、日増しに強まる〝講堂再建〟の声に、屋内運動場と集会・行事の会場に供する体育館が建設されることになった。場所は本館の南、小公園に隣接する用地が手当てされた。

講堂の再建計画は別にあったため、新設施設は、当時流行の講堂兼用の体育館ではなく、体育専用タイプのものが考えられた。

「これから他で建てられる体育館は時代の要請によってより立派のものになっていくであろうから、将来においても見劣りしないようなものを建てよう」

「設備は最新で、理想的のものに…」

安城学園の先進的な発想がこの新体育館にも凝縮された。

5

約八ヵ月の建設工事が終了し、昭和三十六（一九六一）年四月二十一日、竣工式典が行われた。竣工の記念行事は盛大だった。

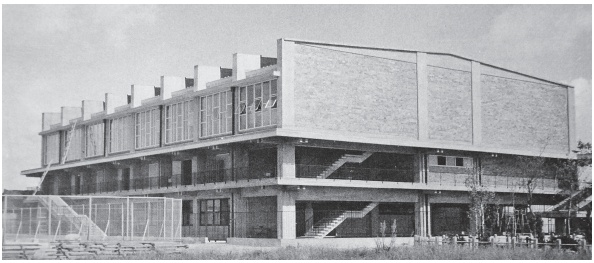
ローマ・オリンピックで金メダルを獲得した体操の小野喬（たかし）選手らの公開演技、日本体育大学と学園との交換バスケットボール試合。翌日には、生徒会記念行事として校内球技大会が催された。

総工費一億一千万円をかけ、三千三百平方メートルの延面積をもつ体育館は〝デラックスな体育館〟の一言で言い尽くされた。

一階には小体育館、クラブ室、ロッカールーム、シャワールーム、保健室などの諸施設。二階にはバスケットボールコート三面分のスペースのメインフロア。そして三階にはフロアを囲むように観覧席も設けられた。

これが当時としては東海地方の体育施設として、一、二位を競う存在となった。

＊



竣工した体育館（昭和36年3月）

そうした中、優れた施設に恵まれたクラブ活動も活発化していった。

「安城学園生として誇りを…」

教育内容の充実に努めるなか、もっとも留意されたことはこの意識であり、その高まりが課外活動として現れていった。

昭和三十二（一九五七）年にはクラブ数は二十を超えた。その盛んなクラブ活動の中から、真っ先に〝安城学園〟の名を大きく高めるクラブが現れた。ソフトボール・クラブである。

昭和二十五（一九五〇）年に創部されたソフトボール・クラブは顧問教師（鈴木三重次・小川毅）の熱心な指導で、昭和三十（一九五五）年には国民体育大会、全日本高校ソフトボール選手権大会への出場権を得、その後九回（昭和三十四年は伊勢湾台風により出場不能）連続出場した。その間、昭和三十三（一九五八）年に国民体育大会優勝の栄冠を得たのをはじめ準優勝二回、そして常時ベスト8に残るといった優秀な成績を挙げて、中部日本における強力チームとして全国的に名を馳せるのだった。

6

クラブ活動では、短期大学も奮起する。

昭和三十二（一九五七）年に創部したバスケットボール部が昭和三十五（一九六〇）年、四年目

にして早くも全日本学生選手権で初優勝する。さらに同部は、以後六年間にわたって連続優勝、〝公式戦二百七連勝〟という輝かしい記録を樹立するのである。

＊

こうして学校スポーツにあって、〝安城学園〟の名を全国に広く高めていく中、学園にとって、昭和三十七（一九六二）年は、創立五十周年を迎えるとともに画期的な布石をする大きなエポックの年となった。

短期大学において、家政科を開設した。既設の生活科・被服科に加えて三学科とした。

同時に、岡崎において男子校を開校したのだった。「安城学園女子短期大学附属高等学校岡崎城西分校」―その校名はこのように長いものだった。

初の全国制覇を遂げた短期大学バスケットボールチーム。左端は石田第２代監督（昭和 35 年）

「明治四十五（一九一二）年、『安城裁縫女学校』を開設して五十年になる。これを記念して、岡崎に分校を…」というのが学園での位置付けだった。それにしても、女子教育に徹して三河地方随一の女子総合学園として世に広く認められてきた安城学園がなぜ男子を対象に学校を開設したのだろうか。

それには、端的にベビーブームの影響があった。

当時、西三河地域には、男子のための高校は公立の高校以外になかった。そのため、地域の高校進学生の多くはやむなく名古屋、豊橋などの高校へ通学することを余儀なくされ、その現実が、

「この地域に男子高校の新設を…」

という要望の声を強くさせていた。それが、男子の中学卒業生の進学率が増加をたどる傾向に加え、ベビーブームの波が昭和三十六（一九六一）年頃から高校に押し寄せ始めると、その声はいよいよ高まった。

あげくは、西三河地域の教育界から安城学園に男子高校新設の白羽の矢が立てられた。

地元から伝統と実績に深い理解と信頼を寄せられての要望はありがたかったが、学園では正直当惑した。

7

永年の女子教育から得た経験が男子を対象にして果たしてどの程度通用するのか―。

男子教育は未知の領域だった。

それよりも、女子一貫教育の完成のためには、まだ色々な事業を推し進めねばならない時期にあった。

だいは、逡巡せざるを得なかった。

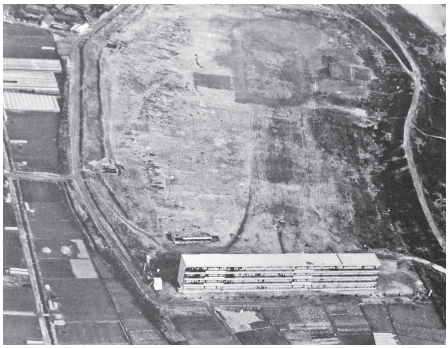
だが、結局、思い至るのは「地域のために」だった。地元教育界の強い要望に応えることが、学園が西三河地域で受け入れられる道であり、社会への奉仕につながるものでもあると判断した。それは昭和三十六（一九六一）年夏のこと。直ちに翌年度の開校を目指して、男子高校創設の準備にとりかかった。

設立場所は、岡崎市の市長はじめ当局、関係者などの協力もあって、西三河地方の中心地である岡崎市が選ばれた。

だが、学園では本館の増築工事を始めたばかりで、資金面で余裕がなく、校舎建設工事にすぐとりかかることができない。このため、とりあえず安城学園女子短期大学附属高校の岡崎城西分校として発足することにし、校舎は岡崎市明大寺町茶園にあった元愛知県繭検定所を、新校舎完成までのあいだ、仮校舎として借りることにした。

こうして昭和三十七（一九六二）年四月十一日、二百二名の新入生を迎えて第一回の入学式を挙行し、西三河唯一の普通科私立男子高校として発足した。

懸案の新校舎は、翌昭和三十八（一九六三）年四月に、岡崎城の西北、矢作川沿いの中園町と舳越町にまたがる用地に総工費九千万円余をかけ、延面積二千九百平方メートルの鉄筋四階建の建物



岡崎市舳越町の校地全景。広い敷地に岡崎城西高等学校の校舎１棟のみ。右は矢作川（昭和40年）

が建てられた。

その土地面積はおよそ六万七千平方メートルに及ぶ広大なものだった。県立の高校などは大体一万坪（約三万三千平方メートル）前後の敷地だったが、その二倍にも当たるものだった。これほどの土地を入手したのも、将来に備えてのことだった。安城の小堤校地はすでに手狭さが感じられ、周辺への拡張も困難になっている経験知から、岡崎の新天地では明日への配慮がなされたのだった。

8

岡崎城西分校は昭和三十九（一九六四）年には校舎を増築するとともに、校名も「岡崎城西高等学校」（現校名）として独立し、昭和四十（一九六五）年には体育館竣工…と、年ごとに着実に充実していった。

教育実態も、教職員や生徒の努力によって格段の〝前進〟を見せる。

十分な校舎も運動場もない中で発足したが、五月末には八つの運動クラブが活動を始め、秋には文化クラブもできて、クラブ数は二十にも…。生徒会も一学期末には発足。強歩大会、校内マラソン大会など岡崎城西高等学校伝統の行事も始まる。

進学校を目指し、五月からは英・数の補習授業を始め、二学期からは学力別のクラス編成も行われた。学力を高め将来の進路を切り拓くための努力が生徒、教師一体となって行われた。

岡崎城西高等学校としてのアイデンティティも出来上がる。

分校から独立校としての第一歩を踏み出した時、学校長として就任した岩城留吉が、高校教育における豊かな経験から、だいの「建学の心」を受け継いで『質実剛健』を打ち出し、以来、この言葉が〝城西教育〟の拠りどころとなっていく。

＊

学園にとって、昭和三十七（一九六二）年という年は短期大学の家政科新設、男子校設立、そして高校本館の増築工事という布石をしただけでなく、創立五十周年という節目の年でもあった。

十月二十七日、記念式典が挙行された。これを機に、だいの寿像が除幕され、これまでの半生を回顧した自伝『おもいでぐさ』が刊行された。

同時にだいは安城市名誉市民に推戴（すいたい）された。四年前（昭和三十三（一九五八）年）には藍綬褒章の叙勲、それに続く栄誉だった。半世紀にわたって営々と教育の道を歩んできただいにとってこの上なく輝かしく、労が報（むく）われるひとときだった。

しかし、だいに「功成りて」といった満足感はなかった。なお、明日に向かって絶え間ない学園構想を練っていたのだった。

学園創立 50 周年記念式典

9

「四年制の専科大学は何を措いても近々に開設の予定を立てています…」

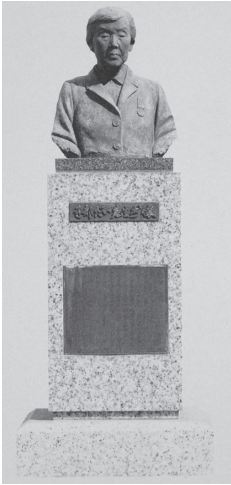
だいは、『おもいでぐさ』の中でこう明記した。

「現在の短大が、以前の女専の後身であることは前に記した通りであります。ところが、旧女専の卒業生は、中等教員の免許状を与えられて、旧制の中等学校に奉職いたしましたので、そのまま新制高等学校教員免許状に切換えられて、高等学校の先生になりました。そこで現在、県内の高校は申すに及ばず、近県を始め、全国各地の高校で多くの先輩諸姉が活躍しておられます。

ところが、今の短大では、高校職員の免許状がもらえないので、そのままでは、高校への進出ができなくなりました。

そこで、そうした先輩はもちろん、本校の伝統ある特色に理解を寄せられる教育関係の各位や、在職の先輩を信任しておられる高校長達から、いつも『高校に安城の出身者が絶えてしまうではないか。何とか早く、大学の家政学部を作らなくては』と勧められております。私としても、もちろんこれを焦っている次第でございます」

だいは、『おもいでぐさ』で現在の心境をこのように吐露し、家政学部を擁した大学設置の必要性を訴えた。しかも、だいの夢は大きかった。



学園創立50周年を記念して建てられた寺部だいの寿像（彫刻家・高村泰正氏制作）

「私の夢はこの家政学部だけに止まることなく展開してゆきます。今や、プロペラ機の時代は過ぎて、ジェット機に移ってきました。もう数年もすると更にロケット機時代を迎えるようになるといわれています。そうなるとアメリカ大陸へも、二時間内外で飛べるのだそうです。世界はますます狭くなり、諸外国も隣付き合いを始めて、往来も自由に気軽にできるような時代が、もう目の前に迫っているのです。

そうなった時、最大の障害は言語であります。私どもは世界に通用する言葉を自由に駆使する必要に迫られます。ご婦人でも、英語ぐらいは身につけておかねばなりません。

かくて、大学に『英語英文学科』を始め、各種の専攻学科を含む『文学部』が欲しい。そして、何何学部、へと夢は際限もなく続くのです。」

―総合学園の象徴として四年制大学を早い機会に設立したい。

だいは、日頃この事を教職員だけでなく学生にも熱く語ったが、その夢は複数学部を持つ総合大学、そして〝安城からの飛翔〟と大きく羽を拡げていたのだった。